

# 「艦」と「丸」

## 幕末から明治期までの艦名表記の変遷

“KAN” AND “MARU” — OLD NAMING OF JAPANESE WARSHIPS

by Koichi Takasu



高須 廣一

(元海将補)

安政2年にオランダから幕府に寄贈されたスピン Soembing。後に観光丸と命名され、公文書には観光丸御船と記された。

明治前期の日本軍艦には、艦名の末尾に「艦」「丸」「船」「号」などが付けられていた。幕末から明治海軍の草創期に、どのような経緯でこうした命名法が一般化したのだろうか。

日清戦争当時、海軍の活躍を伝える新聞記事で、艦名が松島艦、浪速艦のように末尾に「艦」を付けて報じられた。またその後も戦艦三笠を三笠艦ということがあった。それは明治前期に艦名に「艦」を付けて記すのを正式としていた名残である。

大正時代に刊行された「海軍軍備沿革」の艦船年表で軍艦の部に明治20年までの就役艦船名が末尾に艦、丸、船または号を付して記されている。その頃までは、これらの接尾語を付けたのが正式な艦船名であった。

ここで正式といったのは海軍の公文書における艦名の表記法で、それには統一性が見られる。この統一性を根拠にして艦名表記の変遷をさかのぼってみよう。

### 初期の艦名の接尾語

幕府が安政2年(1855年)にオランダから軍艦を寄贈され、初めて洋式軍艦を保有した際に、同艦は原名のままスピン御船が正式名とされた。受領後8カ月して観光丸と命名され、以後の公文書では観光丸御船と記された。また御軍艦観光丸とも呼ばれている。

船名に「丸」を付けるのは日本船に限るという差別意識があったようで、たとえばその少し前に伊豆の下田で遭難したロシアのディアナ Diana 号は当時ディアナ船とかディアナ舶と記された。なお外国船名に「号」を付けるのは慶応の頃から広まったようである。

スピン船でなくスピン御船と呼び、また御軍艦などと頭に「御」を付けて呼ぶのは御公儀(幕府)のものだからである。たとえば御軍艦操練所とか御軍艦奉行が正式名であった。これを軍艦奉行などと御唱替(改称)したのは慶応3年(1867年)正月である。だがその後も日常的に「御軍艦」とか「御奉行」というのが廃れたわけではなかった。明治になっても軍務官の文書に「御軍艦和泉丸」などと幕府が廃止した「御」を付けたものがある。

なお末尾に「船」を付けるのは外国船だけでなく、幕臣の日記などを見ると「観光丸御船」はしばしば略して「観光船」と記されている。これはむしろ日常語であったようだが、丹念に調べれば公文書にもあるかもしれない。

だが公文書でも「丸」に例外があった。それは千代田形、豊島形、君沢形などである。

海軍では大正中期から英語のフォームを形、タイプを型とするのが定着して「船形」は「船型」に書き換えられた。これに従えば千代田形は千代田型になる。

千代田形は1隻しか造られなかったで、千代田形御船を正式名としたが、豊島形は少なくとも4隻あり、個々

の船は豊島形何番船と呼ばれた。たとえば小笠原開拓の指令書には「君沢形1番、6番御船」と記されている。

またアメリカから慶応元年12月に回航されたフジヤマは原名のまま富士山御船を正式名とした。もっとも日常的には富士船、富士丸あるいは富士艦とも呼んでいたと推定される。

## 「艦」の起り

富士艦のように「艦」を付けて呼ぶのは、慶応2年の幕長戦争の頃から日常語として始まったようである。最初は有力艦に対して使用されたが次第にすべての軍艦に付けられるようになった。それとともに運送船には「丸」を付けるが、軍艦は単に朝陽などと呼び捨てにすることも行なわれている。

もっとも「艦」は、それ以前にも漢文調の文章に見られた。漢文調とは、たとえば老中、若年寄を閣老、執政と記したような文語体の書き下し文で、むしろ私文書に属する。

なお勝海舟の「海軍歴史」には安政の頃でも咸臨艦などと記した箇所があるが、これは明治20年頃編者が記述して挿入したものである。

「艦」は最初のうちは候文の公文書には記されなかったが、慶応3年頃から公文書でも使用され始めたようである。

江戸開城の際に徳川家から東征軍に提出した軍艦目録では艦名を呼び捨てにするか、「艦」を付けるかしており、「丸」を付けたものはない。

## 軍務官時代の接尾語

天皇の海軍が誕生して2～3年の間、当局者は正式艦名に無関心であった。旧幕府では「艦」になっていたが、諸藩では主として「丸」を使用していたので、諸藩海軍出身者が発した公文書は最初のうちは「丸」であった。

ただフジヤマはしばしば富士艦と記されたが、これを富士山丸と記した文書もある。

明治元年の秋頃からは、いわば混用の時代であり、運送船に「艦」を付けたものもあった。

要するに戊辰戦争中には文書起草者が思い思いに「丸」とか「艦」を付けて艦名を表記し、はなはだしい場合には一つの文書で同一艦名に双方の接尾語を使用することもあった。しかも文書を校閲する文書班のような組織がなかったらしく、そのまま発簡されていた。

前掲の「海軍軍備沿革」では明治元年の就役艦として9隻の軍艦を挙げているが、そのうち「艦」を付したのは富士山、摂津、武蔵

の3隻だけで、ほかは「丸」を付けている。この3隻だけが明治元年中に軍艦らしい作戦行動を取ったので、それを顕彰する意味で編者が特に「艦」としたのであろう。しかし当時の公文書では、この3隻に「丸」を付けるものが相当数残されている。

## 「丸」から「艦」へ

このように「丸」と「艦」を混用する中で「艦」を常に接尾語としたのは、明治2年2月に領収した甲鉄衝角艦ストーンウォール Stonewall で、これは常に甲鉄艦であった。もっとも甲鉄艦は艦名でなく艦種名である。当時甲鉄艦が1隻しかなかったため、艦種名をいえば即座にどの艦かを特定することができた。艦種名であるから、誰も甲鉄丸と記そうとしなかったのである。

ちなみに甲鉄艦に艦名が与えられたのは明治4年12月である。この時軍務局から「甲鉄艦、今日に至るまで無名にてははなはだ不体裁（みっともない）につき東艦と命じられてしかるべきや」とうかがい出て命名された。

皮肉にも「甲鉄艦」が艦名であろうとなかろうと、それが就役すると、ほかの軍艦にも「艦」を付けるのが次第にふえてきた。

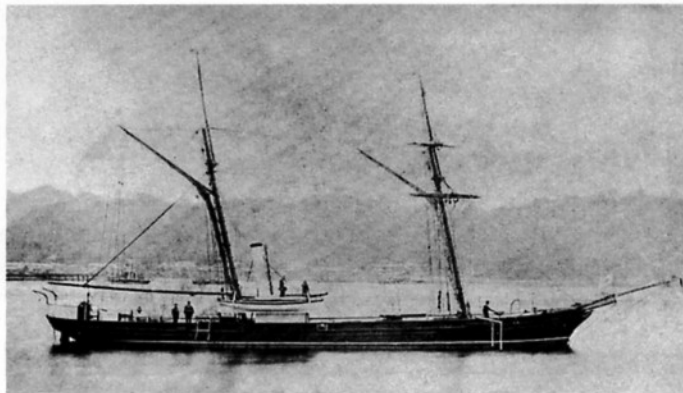
戊辰戦争が終わって兵部省が設置された頃になると、艦名に「丸」を付けた文書はかなり減っている。

諸藩海軍からの上申書に「丸」が記されていると、兵部省からの回答文書にも「丸」を付けることがあったが、諸藩の軍艦献納が完了した明治4年11月以降、公文書では艦名に「丸」を付けるのが廃れたといつてよい。

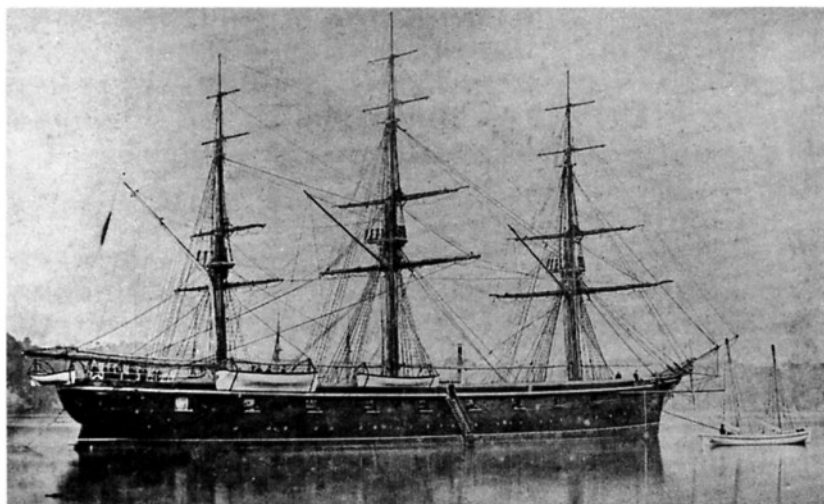
ちょうど甲鉄艦が東艦と命名された頃、「艦」を付記すべしという内規が設けられたのかもしれない。

それまで富士山艦は富士艦とも記されていたが、以後富士山艦に統一されている。また千代田形艦はそれまで千代田艦と記されることがあったが、この頃にはその場合に千代田形艦と朱書訂正されるようになった。

残された文書から類推すれば、諸藩海軍が消滅して日



千代田形。当時例外的に「丸」を付けず、千代田形御船を正式名とした。



慶応元年にアメリカから回航されたフジヤマは、原名のまま富士山御船を正式名としたが、日常的には富士船、富士丸、富士艦とも呼ばれていたようだ。

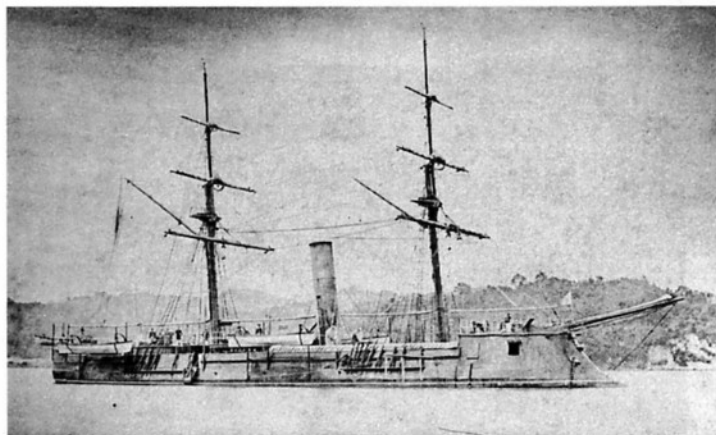
本海軍の一元化が達成された頃から、公文書での艦名表記に統一が図られたといってよからう。

海軍省時代になると、肇敏丸や蒼龍丸を肇敏艦、蒼龍艦と改称した際に、その変更が令達されるようになった。

## 「船」と「号」

前掲書の艦船年表の軍艦の部で末尾に「船」と「号」を付したものが1隻ずつあるが、これらは軍艦でなく運送船である。

「船」を付けたのは明治3年就役の虹橋船である。この船は清国で建造されたアメリカ汽船で、原名はHonqueだが、これを清国では虹橋船と記した。豊津藩が政府に献納するためわざわざ購入した船で、命名する暇もなく右から左へ兵部省に引渡され、原名がそのまま使用された。



東艦。受領後しばらくは艦種名のまま甲鉄艦と呼称されていたが、後に東艦と命名された。

また前掲書には記載されていないが、海軍では同じ年に樺太船を購入した。これは海軍で命名したものだが、公文書ではもっぱら「船」を接尾語としている。

同書ではまた明治8年就役の千早号だけに「号」を付けている。確かに当時の令達文書には千早号と記されているが、「丸」にしなかった理由は不明である。

海軍省内のメモに類した文書には浪速号のように記した文書が残されているので、日常の会話では艦名に「号」も付けていたようである。だが

公文書で艦名に「号」を付したものはない。

今日、「号」は船だけでなく列車その他の名前にも付されるが、元来は「丸」ほどでないにしても器物や動物を命名した際に、その接尾語に使用されてきた。

号は呼び名を意味する漢語だが、普通名詞として「号」と「名」には使い分けがあった。たとえば年号というが年名とはいわない。船名と船号とは意味が異なっていた。

江戸時代のオランダ風説書で、長崎の通詞はその中のカタカナ名に人名とか地名と注記していたが、船の場合には「船号」と記した。船だけが名でなく号なのは、漢語の「船名」が船種あるいは船型の名を意味したからである。たとえば中国で造船が栄えた明（ミン）の時代の書物で船名として宝船、戦船などの船種を挙げている。

もともと慶応明治になると、船の固有名に船名と注記したものも見受けられる。時代とともに語意が変化したのかもしれないが、昔どおり「船号」で通す注記者もいた。

幕末に長崎海軍伝習所でコッتل船（カッター）の建造実習が行なわれたが、その上申書ではコッتل船の下に船名と注記している。伊豆の戸田でロシア人の指導によって造られたヘダ Xeda を「船名はシコナ」といった人がいるが、これは誤りではない。現代語に訳すと「船種はスクナー」になるからである。

「号」はこのような因縁から、特に外国船名の接尾語として長く生き続けたのかもしれない。

ところで、海軍でも船名の末尾に「号」

を正式に付けたものがあつた。それは明治17～22年の間に機雷敷設と魚雷攻撃用に建造された第1～第4震天号である。これは任務が「丸」を付けた他の曳船と「艦」の軍艦との中間的ということで「号」にしたのであろう。だが日清戦争後は「号」を付けなくなった。

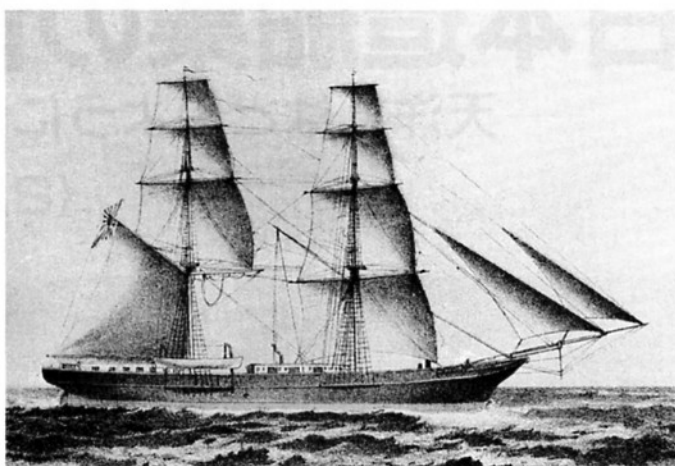
### 明治21年以後の艦名

海軍省発簡の文書で艦名を単に何々と呼び捨てにするようになったのは明治21年9月からである。前掲書によると9月21日からとあるが、公達された成文規定としては同月28日の達に「艦船定員表中艦船名の下にある艦の字、丸の字を削除」とあるのが最初のように思われる。なおこの達の「丸の字」に該当したのは石川丸のような練習艦だけである。

したがってその後の令達では、たとえば単に浪速とか軍艦浪速など適宜に表記された。それが明治33年6月改正の軍艦水雷艇類別等級で「軍艦を呼称するにはその類別の何たるを問わず『軍艦何』をもってす」と規定されてからは、単に浪速と記すようなことはなくなった。

当時接尾語がなかったのは軍艦と一部の曳船型敷設艇だけで、運送船や船名を有する雑役船は「丸」を付けたままであつた。運送船名から「丸」を廃止したのは大正4年8月、雑役船では大正9年7月である。

もっとも例外はあり、たとえば明治35年に三菱から献上した初加勢は雑役船に含められたが「丸」がなく、また昭和14年に雑役船に編入された元御用船の三浦丸な



練習艦石川。明治21年以後、艦船名から「艦」や「丸」が削除された。ただしこの時「丸」削除の対象となつたのは練習艦だけで、運送船などは船名に「丸」が残された。

どは「丸」を付けたままであつた。

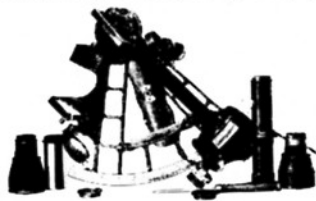
\* \* \*

冒頭に述べた日清戦争の頃には、艦名に「艦」を付けないのが正規になっていた。だが人々は古くからの習慣でフネの名には艦、号、丸などを付けないと落ち着かなかつたようである。

ところが時代が経つと、今度は軍艦に「艦」を付けて呼ぶのに違和感を覚えるようになった。その結果、軍艦はそもそもの始まりから軍艦何々と呼ばれていたような錯覚を生じた。

今日、明治前期の軍艦に「艦」を付けずに呼んでも一向に差し支えはない。ただ「艦」を付けるのが正式な呼び方であつたことは記憶の端に留めておいてよからう。

## 船舶備品展示即売



▶ クロノメーター・コンパススタンド・舵輪・油灯・  
フォグフォン・六分儀・信号旗・コンパス・銘板・  
浮環・気圧計・号鐘・双眼鏡・電話機・海図などす  
べて本船で使用の備品を多数展示。

▶ 開設時間 10時～18時

(但し、17日は12時～18時、最終日は12時まで)

## 東京特設会場オープン

▶ 期間 10月17日(火)～10月20日(金)

▶ 千代田区神田神保町2-48



〔マリン・ショップ 船匠 カーペンター〕

〒650 神戸市中央区元町通3-5-10/海文堂出版神戸支店内  
TEL (078) 331-2664/FAX (078) 331-1664